

## 青崎有吾『水族館の殺人』例会レジュメ

平成25年9月28日

### ■作者について

青崎有吾（あおざき・ゆうご）

1991年生まれ、神奈川県育ち。明治大学ミステリ研究会所属。

古典的本格の作風を好む。好きな作家はダイアナ・ウィン・ジョーンズ、芦辺拓、有栖川有栖、ジャック・フットレル。エラリー・クイーンと綾辻行人は別格とのこと。

### ■前作『体育館の殺人』について

第二十二回鮎川哲也賞受賞作。〈裏染シリーズ〉一作目。作中の時系列は『水族館の殺人』の一ヶ月ほど前。タイトル通り体育館（もちろんクローズドサークルではない状況）で起きた殺人事件を扱っている。タイトルはもちろん〈館シリーズ〉へのオマージュだろうが、基本的には古典的フダニットを現代でおこなおうとする姿勢がうかがえる。エラリー・クイーンの影響しているかについては飯城勇三『エラリー・クイーンの騎士たち』（論創社）で考察されている。

### ■例会課題本『水族館の殺人』について

前作同様、フダニット。一作目で語られなかった設定などが描写される。

### ■記述形式について

第二章までは、柚乃視点の記述、香織視点に寄り添った記述、優作・仙堂視点に寄り添った記述の三つのパートに分かれている。第三章以降は柚乃視点で進む。エピローグのみ裏染に寄り添った記述。香織に寄り添った記述は事件発生後、口頭で柚乃に伝えられていると思われる（p.250より）。優作・仙堂視点の捜査状況の記述は優作の口から電話で語られていると思われる（p.158より）。

### ■舞台（水族館）について

- ・客観的データ利用の必然性→監視カメラ、ボイスレコーダー、写真
- ・番号認証、監視カメラ→外部犯の可能性の消去
- ・殺人が行われる動機（殺害対象ではなく、殺害場所としての動機）→殺人の必然性
- ・その他周辺状況の設定（後述）

### ■推理について

大きく分けてキャットウォークのトリック看破と犯人指摘のふたつだが、両者は独立したものではなく、前者を客観的な証拠として採用するための手続き（実験）をおこなったうえで、後者の推理に進むような流れになっているのは注目すべき。結局、警察によって実証性が与えられるので実験はただのサービスシーンだったと言えなくもないが……。

以下、例会ではp.88 キーパースペース二階の図を参考にしつつ、バケツとモップの推理について解説をおこなう。

例会担当者の指示にしたがって、事件現場の状況を整理しつつ書き込んでみよう！

#### ■何でもは知っていないモップ

裏染が推理に利用するのはモップとバケツだけではない。探偵役は事件の状況から、必要な情報を適宜引き出して容疑者を減らしている。モップとバケツからわかるのは、あくまで犯人が殺害現場でどのような行動をおこなったかのみ。犯人を指摘する（容疑者を一人に絞る）ために必要なのは、特定の人物が犯人でないという証拠だ。けれどもそれは推理の前提として描写されている、地の文にあたるものなので、解決編に入るまで裏染が言及することは多くない。刑事や香織と情報を共有した時点で確認が終わっているものもある。

#### ■容疑者の排除について

まず p.118 からの証言にもとづいて、9:50~10:07 のあいだの人物行動表を作成する。p.192~193 のまとめが便利。レジュメには載せないなので、例会に参加しなかった人は各自、チェックして作成すると解決編での理解がぐっと楽になるので一度つくってみるとよい。視覚的効果がいかに絶大かを知っていただきたい。フーダニットの基本。

このアライバイ表をもとに周辺状況の設定を考慮していくと、容疑者が絞り込めるようになっている。

#### ■探偵役の気づくタイミングについて

犯人指摘の決め手となるのに必要な情報はすべて、探偵役が直接見聞きしたもの、あるいは証拠として警察に認められたもの（客観性をもちうるもの）となっている。

ここで重要なのは、裏染は被害者の生きている姿を見ているわけではないということ。香織は基本的には口頭で柚乃と裏染に事件前のことを伝えていると思われる。これは、読者と探偵役のもっている情

報が正確には一致していないことを意味する。ゆえに、解決編の直前に柚乃の話と写真によって事件前と後の違いに気づいたときの裏染の反応に読者は戸惑いを覚えることになる。最初から知らされていた情報にもかかわらず、それが探偵役に伝えられるだけで犯人指摘に向かうことができるようになる。いわゆる名探偵描写だ。読者と探偵役のもつ情報がほぼ一致した瞬間が、気づきのタイミングになっている。

### ■意外な推理について

裏染の推理を分解していくと、犯人指摘に関する推理はかなりシンプルな方法をとっていることがわかる。そこから指摘される犯人も、十一人の容疑者のなかでもっとも意外な人物というわけではない。動機に関しても、水族館という場所での殺人に必然性を考えれば、けっして異様とは思えない（計画性に問題がないとは言えないが）。

そう話をしていくと、現場に残された証拠から堅実な推理を積み重ねて、それがどれだけ意外性をもたらるか、という一点のみが注目に値するように思われる、が、そうではない。

意外な推理が犯人にたどりつくためには、さきほども述べたようにその基盤となる状況設定の記述が必要となる。バケツとモップから演繹されたタオルに関しては人物や建物の描写と合わせて複数回にわたって書かれているし、犯人指摘のキーとなる時計の描写は証言のなかで何度も登場し、読者にルールづけを意識させながらもその逸脱には気づかれなくなっている。意外性をもった推理の演繹が現実性をもつための配慮がほどこされている点にこそ注目すべき。

また、意外な推理は探偵役の特権であるという点から評価することもできる。仮に読者が犯人を見抜けたとしても、裏染の推理を正確に辿っていくことは難しい。これをアンフェアとする読者もいるかもしれないが、推理の根拠には読者が知りえなかった情報は使われていないことを指摘しておく<sup>ii</sup>。

### ■叙述トリックと意外な推理について

蛇足。名探偵が意外な推理をおこなえるが、叙述トリックを見ぬくような推理は作中人物にとっても意外でもなんでもない。推理の必要性がないゆえに、特権性ももちえない。作中作の謎を解くならともかく、読者に仕掛けられたタイプのトリックと意外な推理はとて相性が悪い。

### ■まとめ・その他

---

<sup>i</sup> ミステリーズ！ Vol.56「青崎有吾インタビュー」参照。

<sup>ii</sup> p.88の見取り図に鏡や水滴が描かれていないのは、あえていうなら不親切だろうが、読者が真相に気づきやすくなってしまいうから、あるいは探偵の推理の意外性が弱くなるから省かれていると思われる。